

「この世界は滅びに瀕している」

幾許かの昔、ある賢者が叫んだ言葉。

しかし、日々を穏やかに過ごしている人々に「滅び」はあまりにも遠い言葉であった。

今。

この世界は依然として滅びに瀕している。

だが、やはり人々は穏やかに日々を過ごしている。

「町」の中にさえいれば安全だから。

授かる子の半数以上が死んだまま生まれて  
死ぬ人間よりも生まれる人間の方が少なくなって  
「町」自体が少しずつ小さくなくても

しかし、平穏な日常を暮らしている人間にとって、「滅び」はやはり遠い言葉のままであった。

それは、「滅び」がもう本当に目の前に迫っているから。

「滅び」を視界に入れたら……もう、それしか見えなくなるから。

この世界は、緩慢に死を迎えつつある。

数少ない恵みを奪い合い、分け合い、そしてまた奪い合い……

自らの死と、全ての終わりのどちらが先に来るかもわからない世界で、しかし、行われることは、いずこにもある生の営み。

それは、愚かしくも見える、いじましい人の営み。

……あなたは、そこから、ほんの少しだけ飛び出した存在だ。

「町」から出て、死と滅びの蔓延る外界に出た旅人だ。

この物語は、旅人達が紡いでいく物語。

その命が芥のように散っていくのか、はたまた、希望の種になるのか……それは、まだ誰にもわからない。